

「故郷を追われて」

ウー、ウー、ウー……。と行政無線のサイレンの吹鳴、平成23年3月12日、午後8時15分、都路町民が避難を余儀された瞬間でした。

私は、昭和46年旧都路村役場に奉職、平成17年3月田村5町村が合併し、田村市が誕生しました。行政一筋に38年余の勤務を終え3月末日の退職をまじかに控え、今後の生活設計を始めた矢先の出来事でした。

田村市の復旧復興を図るため、退職が1ヶ月延長になり、行政局長としての職務の重責に身が震えましたが最後のご奉公に微力ではありますが全力を出し切ることにしました。(延長1ヶ月は口で言い表せないほどの出来事でありました。)

3月12日早朝より、大熊町。双葉町民が都路公民館、体育館に避難、都路のぬぐい心で各行政区等の協力を得て炊き出し、避難者の受け入れ対応をしている矢先、日村市長の避難指示を受け、都路町民3千人が避難することになるとは想像にもつかなかった。

都路に避難された大熊。双葉町民の方々は落ち着く暇なく次の避難所へ移動していただいたが大変な思いをされたと思慮します。

消防団都路地区隊の協力の基、各行政区家庭の巡回、当日の午前0時、暗闇の中「みやこじ」を後にした。

都路町民は、田村市内、郡山市、三春町の親せきの家、そして遠くは新潟県、関東圏まで避難し、県内外へ分散することになりました。その避難者の居住地の把握に努めていた。操業開始前のデンソー東日本の工場で、都路町民、大熊町民の共同生活が始まり、寒さ、食事等の対応は大変でした。徐々に落ち着きを始めたころ、都路町民は、旧春山小学校へ移動、行政区ごとに部屋割りをし、不満があるものの共同生活が続いた。

その間、航空自衛隊大滝根駐屯地の隊員による炊事支援、入浴支援、数多くのボランティアをいただき今でも感謝しております。

誰もが1週間も避難していれば帰れると思っていたのに、警戒区域・緊急時避難準備区域と指定され長期の避難生活を始めることになった時の落胆は図り知れないものでした。

6月から都路町民が応急仮設住宅に入居することで、田村市社会福祉協議会において応急仮設住宅生活支援相談員を配置すること、私は7月より勤務を始めました。

東京電力福島第一原発事故から1年が経過した今、原発の安全神話が崩壊、私たちは絶対的な安全はないということを知らされ放射能汚染の恐怖感や風評被害は一向に収まりません。

また、原発事故によつて、つながれた地域、人の和(輪)が、壊れ一変してしまうことも認識しなければならない。汚染された地域が元に戻るまでは長い時間がかかります。

ただ、事故が起きた現在、賛否両論はあるかと思いますが、旧都路村は、原子力発電所立地隣接市町村にあつたことから、電源三法交付金の核燃料税補助金、原子力立地交付金等を受け、公共施設、村道、農林道の整備など都路の地域発展に、少なからず東京電力の恩恵を受けていたことは事実であります。

現在、避難生活を余儀なくされている都路町民は、避難先で仕事を見つけたり、便利な生活に慣れる一方、避難生活が長引くことで、町民の不安や不満は増しております。

緊急時避難準備区域の解除、警戒区域の見直しにより、町民の一部は戻っておりますが、都路地域の除染が終り、幼・小。中学校の再開(平成25年度から再開見込み)をしない限り子供を持つ家庭は避難生活が続くことになります。

故郷「みやこじ」の人の和（輪）が一刻も早く元に戻ることを祈ります。

民報サロン 第 117 期 今泉清司

---

### 「がんばっぺ 都路」

東日本大震災、東京電力福島第1原発の事故により避難し、応急仮設住宅、借上住宅等に入居している方々の安否や安全確認(見守りや訪問活動)、自立への支援(困りごとの相談。話し相手、必要な生活支援)、孤立防止などの仲間づくりや地域づくりを進める為に、応急仮設生活支援相談員が配置され、その一員として、日村市船引町内に4箇所360世帯田村市都路町、常葉町の一部、双葉郡大熊町・双葉町・富岡町・浪江町等の避難されている方の見守りをしております。

住み慣れた地域を離れて不自由な避難生活、収束の目途も立たない不安、仕事を失った方、環境の変化で体調をくずした方、新生活を始めた方、それぞれ状況が違います。

毎日、できるだけ多くの方々と話をする事で孤独死・孤立死だけは避けるよう訪問をしております。

個人の心の問題にどこまで踏み込んでいけるか難しいものがありますが訪問を重ねることで、心を開いてくれます。

それぞれの仮設住宅に自治会長他役員が決まり自主的に活動運営され、さらに、サロン(茶話会)代表も決まり、毎週水曜日、健康講話相談(保健師・栄養士が講師)、健康体操、移動サロンや第2・4木曜日はボランティアによる縫い物教室など自主的に開催されるようになりました。定期的にマッサージさんの訪問、適宜に炊き出し、音楽、マジックのボランテ

イア等々があり、80代の女性は「ここでの生活は、みんなと話しできるのでいいわい」、70代の男性「買い物も自由にできて便利だわい」、50代の男性「多くのボランティアの方々が来ていただいて楽しく過ごすことができるわい」と何不自由なく生活ができることに喜んでいます。

ただ、サロン等に参加する人はまだいいですが、参加しないで悩んでいる人がいるのでその引出しに苦慮しているのも現状です。

避難前は多少不便な生活であつた町民は、避難したことで便利な生活を1年過ごしてしまい、ここでの生活に慣れてしまったことは否めない、その慣れに怖いものを感じます。

本当にこんな生活でいいのかと自立を支援する立場にある自分としては自問自答することもある。

コメが作れない、野菜が作れない、除染が終わらない、戻つても何もすることがないから帰らないと言うけれど、本音は早く故郷に帰りたいとの気持ちを裏に持っているのが読み取れます。

いづれにしてもこのまま避難生活を続けることはできません、長い避難生活が続けば老若男女の気持ちは「みやこじ」から離れます。

先に故郷みやこじの人の和(輪)が一刻も早く戻ることを願うと記載しましたが、人と人、心と心まで離れていくことに危機感を感じるようになりました。

戻るかどうかは個人や家族が判断するしかないと思います。

ただ、戻れる故郷は必要ではないでしょうか。いち早く、負けていらんねーと都路に戻って頑張っている町民もいます。故郷の熱い思いがなくならないよう頑張ろう。

幸いにも、職員在職中、多くの友人と出会いました。県OBのAさん、現職のBさん、実業家のTさん、都路の地域をなじよにかしなくてはとアドバイスを受け、避難後も勉強会、現地視察などをし、都路の再生、地域おこしに向けて援助していただき、準備の段階です。

また、応急仮設住宅へボランティアに来ていただいている方々との知人も大勢でき、都路に戻っている町民、避難生活をしている町民との交流、絆を深めるため都路でのイベントを企画しているところであります。がんばっぺ皆さん!!!

田村市都路町 生活支援相談員 今泉清司